
MADE IN HEAVEN

Z10

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MADE IN HEAVEN

【Zコード】

Z6217M

【作者名】

Z10

【あらすじ】

天国にサマヨウ魂を送るため、下界に降り立ったガンツー。
だが行つた先は田舎で幽霊などいなかつた。
そのため適正者どうしで、昼飯を賭けて戦うこと。
だが相手にはあの戦国武将の姿があつた・・・。

その2 模擬戦

明日は土曜日、毎週土曜には手前の家の適正者と模擬戦をするらしい。

なんでもこの辺には幽霊の類は少ないらしい、そこで半年前に引っ越してきた「前田 恵」と言つ適正者と口曜の昼飯を賭けて戦つていふと言つ。

「今週は俺たちが攻めの方だな」アゴヒゲを触りながら笑みを浮かべるクリス

「そうですね、今度こそ勝ちに行きましょうー」ベンは片手剣を持つまま意気揚々とする。

ベンはカナダ人でクリスと年代が近いせいが、いい相棒といったかんじだ。

ちなみに1978年に交通事故で死んだらしい。

「問題はどう攻略するかだな・・・」フリーは手前の家を見つめながらつぶやいた。

フリーは1938年の日中戦争で死んだ言つ。

「今回からは6対5だからいけるでしょ」マリアはウインクしながら喋りかけてくる。

マリアはスペイン出身で死んだ経過は教えてくれなかつた。

「勝つた例がないって、ほんとなのか?」俺は小声でつぶやく。
「相手がね・・すごいの!」冬姫は苦笑いを浮かべる。

「すごい? ヘラクレスでもいるのか?」

「ヘラクレスは誰か知らないけど・・あの真田信之がいるのよ!」

冬姫は大声で言つ。

一同「誰?」

「やっぱり、知らないか・・すごい武将なのに、弟の方が目立つからなー」ため息つく冬姫

「それだけじゃない！二国志で有名な韓遂かんすいもいるんだぞ」フーは怒鳴りながら言った。

一同「誰？」

「なぜ知らない！知らないとは罪だ！」フーは熱弁するも誰も聞いていない。

「さて・・どう攻めるか、誰か策とかある？」クリスはみんなに問い合わせる。

「敵には韓遂がいる！策など無意味だよ」フーがまた怒鳴る。

「6人で威勢に各方面から攻めよう！」マリアは自信満々で答える。「旗取り合戦だぞ制限時間つきの、行き着くところは一緒なんだぞ。一点突破しかないね！」ベンも自信ありげだ。

「陽動、本命、奇襲の3組に別れて陽動は表から堂々と攻めて。本命は裏から、奇襲は上の電線から攻める、ってのはどうだろ？？」

俺はふと思いついた事を言った。

「面白い！ならメンバー分けはリーダーの俺がしよう」クリスは少しニヤつきました。

「武器は何がいい？」陽介は勉強中の手を止めガントツに問いかける。武器などは適正者が作れる、天国から授かった力だ。複雑や銃器などはつくれないので簡単な武器ならものの数分でできてしまう。

「そうですね」ナイフを20本ほどそれから少し長い短剣を一本で「そんなに・・作るからには必ず勝てよ！」ため息を混じりに陽介は答えた。

ガントツは夜空を見上げる、星は見えず雲が覆いつくしている「明日は雨か？」年甲斐も無く緊張していた。

「ひどい雨だな・・・夜の間に止むかと思いまやひどくなる一方だ。
「雨だらうと中止じゃないしね」外を見て冬姫がつぶやく。
「もうすぐ8時だ、各自準備はいいな！」クリスが怒鳴り声をあげ

る、8時から12時までの4時間で争う。時間内に旗を守るチームと攻めるチームこれを交互にやつてているそうな。

「ガンツ！オトリは任せた！」ベンは背中を叩いて窓から外に飛び出す、そのあとに続きクリスも飛び出した。ふたりは本命部隊で裏側に回り攻める。作戦開始は9時頃、10分前に俺と冬姫が表から攻め。

奇襲の一人は10分遅れに電線から突入する。

「俺たちも、そろそろ電線を伝つて電柱で待機しておくよ」フーは槍を構え握りこぶしをつくる。

「じゃ、おたがい頑張ろう！」マリアも笑顔を見せて飛び出した。

15分前

「さて、行きますか？」装備を確認し窓から外に落ちる。魂だけの存在故にどれだけ高い所から落ちても問題無いにしろ・・・さすがに怖い。

家の前の駐車場を横断し前の道に出る「車にひかれたら転送されるから、気をつけて！」後ろから冬姫が注意をうながす。

魂だけの存在なのに物体と物体に挟まれると転送されるとの事。

「雨で見えにくいな」

「今なら大丈夫！行くよ！」冬姫は言い切る前に走り出した。

門を潜り庭の植木に身を隠す。「所で旗はどこにあるんだっけ？」

「2階の手前の部屋の机の上にあるはずよ」冬姫は小声で答える。

そろそろか？庭の真ん中に行き「正々堂々出て来い！」ガンツは叫ぶ。

2階の窓から人が飛び降りてきた、右手に槍を左手に小太刀を持つ侍が近づく。

「真田信之！」冬姫は驚いた表情を見せる。

「面白い、新人だな？お相手いたそう！」槍を振り下ろすも冬姫が

刀で防ぐ。

「やらせない！」

「じゃまだよ・・姫！」冬姫を蹴り飛ばす

「ここは任せろー早く行け！」両手でナイフを投げつけるも、槍で弾かれる。

「無理はしないで！」冬姫は不安な表情を見せ家の壁を登り始めた。

「1対1で勝てる？」

「自身過剰はよくないぞ、ノブちゃん！」挑発しナイフを投げつける。それをかわし槍で突進してきた。

庭の隅まで追い込まれる。「クソ！」短剣で防いでいるものの、そろそろ限界。

ガンツは押し負け溝みぞに落ちる。

「さて・・潮時だ。転送してやろう」

「追い込まれたか？この溝を登るのはきついな・・」ノブと向かい合ひ。

雨がしだいにひどくなる。

ガンツはナイフを投げる、槍で弾きながら接近していく。

側面の壁を蹴りスライディングしノブの股をくぐる。

短剣で攻撃するが左手で?^{つか}まれる。ノブが槍を捨て背中にしまつて

いた、小太刀で刺してくるも左で抑える。

「いい加減あきらめたらどうだ？」ノブは力みながら発する。

「デビュー戦で負けられないんだよ！」ガンツは両足で蹴り飛ばす。

「強情な・・」槍を拾うノブ。

アーティアーティア

溝の上流から波が押し寄せる

「ちょい！勘弁しろ・・」二人はそのまま流される。

荒波の中で敵の鎧が見える、ナイフを投げるが当たったかどうかは定かではない。

「くそ！」ものの数十秒で水路に流される。

溝から水路までの落下中、ノブの姿が見える。それは一瞬だつたガソツがナイフを抜く間にノブは槍を振り下ろしていた。

「どこだ？」ガンツが目覚めたのは水槽の中だつた。

「転送おめでとうー誰かにやられたか？」目の前には見慣れぬ天使が立つていた。

そのあと地上に帰ると、なんと俺たちのチームが勝っていた。俺が真田信之を引き離したおかげで、屋根の上で4対4で戦い。その間に冬姫がノブが下りてきた窓から侵入し旗を取つたとの事。なんだか勝負に負けて試合に勝つた・・そんなんじだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6217m/>

MADE IN HEAVEN

2010年10月10日16時41分発行